「茶旅」"こぼればなし"

(32)

茶旅の収集品 松下コレクション

コラムニスト　須賀　努

お茶の旅をしていると、年に何回かは静岡に行く機会がある。以前は茶農家を訪ね、茶畑を見学するといったパターンだったが、今回は『日本統治時代に台湾で活躍した茶業関係者』の資料を探すことが目的だった。最近は茶の歴史に追われる、いや追う身だが、ただ一つ、どうしても行きたいところがあった。

茶旅の大先輩、先達と言えば、まず思い浮かべるのは元愛知大学教授の松下智先生であろう。既に60年以上に渡り、アジア各地の茶産地を隈なく回り、『茶の源流』を訪ね歩き、研究を重ねられている。その著書を拝見するだけで、なぜ茶旅が必要なのか、その意味を見出すことができ、常に参考にさせて頂いている。

筆者が初めて読んだ『茶の原産地紀行』では、今から60年以上前の1962年、ちょうどその年革命が起こったビルマへ入られ、シャン州のナムサンを視察した様子が書かれている。何とも貴重なお話をワクワクしながら読んだが、先生に直接伺うと『あと一週間遅かったら、新政府に拘束されていたかもしれない』と笑っておられた。まさに歴史の中を歩いて来られた、重みを感じる。

筆者が茶旅を続ける中で、中国の茶産地に行く機会が非常に多くなっている。何しろ中国には茶畑が多過ぎるのだ。湖北省、湖南省、安徽省、雲南省、そのどこへ行っても『1980年代、90年代に日本の著名な茶の研究者が来た』と言われ、よくよく聞いてみるとその殆どが松下先生であった。元国営茶工場の幹部で実際に先生を案内した人と出会うこともある。山の中の茶産地で先生のお名前を聞くことは、日本人として何とも誇らしく感じる。

だが今ですらも行くのが大変な中国内陸部、当時の交通事情では、そのご苦労はいかばかりであったろうか。30年前の先生の年齢は現在の筆者とほぼ同じであるが、とてもとてもあの困難な道のりを、歩んでいく気力と体力はない。お茶の歴史に賭ける情熱が先生を突き動かしていたのだろうか。

ただ中国では多くの地方で、茶の歴史について、自分たちに都合の良いように編集し、特に検証などもなく、書籍などに記載している例を数々見掛ける。その中の権威付けとして先生の名前が使われるケースも沢山見受けられる。これは残念なことであると同時に『中国の歴史は長いが、その長い歴史、特に茶の歴史はあまり保存されていない。今歴史を掘り起こそうとしても、国内で見つけることが難しい』という現実を端的に表している。

松下先生とは一昨年、ベトナム茶旅にご一緒させて頂き、そのことは2016年4月号『ベトナムにもいたヤオ族お茶との関係は』にすでに書いている。お茶と中国の少数民族との関係、話には聞いていたが、実際に目の前で繰り広げられた調査の内容を見ると、いくつもの納得できる事象が存在し、とても書籍からでは分からない、真の茶の歴史が見えてくる思いであった。先生とお話していると、意外な事実を提起されることも多く、それを自分なりに咀嚼、実感するために、茶旅にまた意欲が沸く。

写真：松下コレクション会場

そんな松下先生の60年以上に渡る茶旅の収集品が整理され、正式に展示が開始された。場所は袋井市の浅羽支所3階。袋井駅からバスに乗り、15分位行ったところにある。かなり広い一室には、湖南省・湖北省の磚茶が展示され、中にはトワイニングが作らせた米磚茶まであった。少数民族とお茶及び檳榔の関係も説明されており、日本の黒茶までが置かれていた。如何にも先生らしい、従来のお茶の展示とは一線を画す、本格的な作りとなっている。書棚には、中国や日本を中心にした茶関係の数々の資料が纏まっており、ここで調べものをする人すらいたほどの充実ぶりだった。

それでも先生は『日本にこれまで世界的な茶の文化・歴史が分かる展示館がなかったのは残念だった。まだまだ整理が必要』と満足していなかった。更には『来年はベトナムに行こうと計画中だ。90歳でインドのダージリンに行けたらいいなと思っている』と益々意気軒昂なので驚いた。そして少数民族とお茶の関係の執筆も進んでいるという。その出版を心待ちにしているのは筆者だけではあるまい。

以前このコラム（2016年12月号）でも取り上げた、中国茶業界の泰斗、張天福先生が去る6月4日に亡くなられた。数え年で108歳の大往生。108歳は『茶寿』ということで、中国でも相当に話題になっている。先生にそのお話を伝えて、『茶寿までお元気で茶旅してください』とお声がけすると、にっこり笑っておられたのが、何とも印象的だった。（すが　つとむ）